

コスタリカ現地レポート 3

佐原 良祐*

3-1 一時帰国

去年の11月になるが日本へ2週間、一時帰国をしてきた。コスタリカからアトランタ経由で成田着、旭川の実家に着くのには丸2日以上かかった。分かっていたが驚くほど遠かった。成田空港のコンビニに行き、おにぎりを久々に食べると美味すぎて感動した。それから何を食べても久々の日本食は全てが美味しく、ひたすら食べ続けた2週間だった。

今回の帰国は主に休暇のためであったが、現地では売っていない物の買い出しと相談も兼ねていた。他の協力隊が派遣されている発展途上国に比べると、コスタリカは比較的発展しているが、それでも日本に比べると品物が全てにおいて揃っていない。例えばカメラ類は値段が高いうえに品数も少ないため活動に適している物は売っていない。また似たような調査をしている方にアポを取り相談にも乗ってもらった(図3-1)。

スーパー・コンビニの店員がテキパキ動き、友達と約束しても誰一人ドタキャンなしに時間通りに来てくれて、また似た調査をしている方達に相談をしに行った際も、親切に色々教えていただいた上にその対応の早さにも驚いた。コスタリカの人は基本的に全てがかなりゆっくりとしていて、基本的に約束をしても流れてしまう事の方がむしろ多いので、逆カルチャーショックを受けた。短い滞在であったが色々な物も買え、相談もできたのでリフレッシュしてとても良い一時帰国になった。



図3-1 相談するために訪れた、神奈川県立 生命の星・地球博物館。

*独立行政法人国際協力機構 (JICA) 青年海外協力隊
E-mail: takakuraken.takakuraken@gmail.com

3-2 日本祭り

人ごみが好きではないので行事・イベント等にあまり参加しない私だが，現地の友人に誘われて在コスタリカ日本国大使館が主催する日本祭りに参加してきた。Museo Rafael Angel Calderón Guardia という小さな博物館で行われていて，折り紙や日本の風景写真等の展示物や，コスプレ，また囲碁や生け花等の教室が開かれていた (図 3-2)。コスタリカでは "Otaku" という単語が通じるほど，アニメ，フィギュア，ゲームやコスプレ等のいわゆるオタク文化が発展しており，こういった日本祭りには多くのコスタリカの "Otaku" 達が集まっている。日本人でも知らないマニアックなアニメを見ていたり，仲良くなって部屋の写真を見せてもらうと部屋中がフィギュアだらけになっていたりしている。

オタク文化には興味がない私だが，お祭りに来ている人たちは親日家の人達ばかりで日本人というだけで色々話しかけてくれて，さらに日本人の私がコスタリカ人に花札と囲碁の遊び方を教わるという逆転現象もあって日本祭りは色々面白かった。



図 3-2 日本祭りの様子. (A) 鶴の折り紙の展示. (B) ゼルダ姫のコスプレをする女性. (C) 小さな子供もルフィのコスプレ. (D) 折り紙で作られた世界一美しい鳥 “ケツアール” (撮影：Sara María Delgado Solano).

3-3 最近の活動

始めは貝やウニ等の色々な分類群の海洋生物を数多く採捕して標本を作り、それ以外にも何か調査をできたらなと考えていた。だが色々な事情があり途中でそれを止めて、今は魚類のみの調査をしている。最近は主に勤務地のマヌエル・アントニオ国立公園内に限らず、付近の海や川で朝・昼に魚類を採集して国立公園内の職員寮に持ってきて夕方標本を作って、標本がある程度たまったら後日、首都にあるコスタリカ大学動物学博物館に持っていき登録をするという事をひたすら繰り返している (図 3-3)。

また魚類は標本にするとすぐに独自の色彩を失ってしまうため、シュノーケリングで魚類の水中写真を撮って加工して、神奈川県にある生命の星・地球博物館に登録をお願いするという事もしている (図 3-4)。



図 3-3 黙々と標本を作っている筆者の様子。

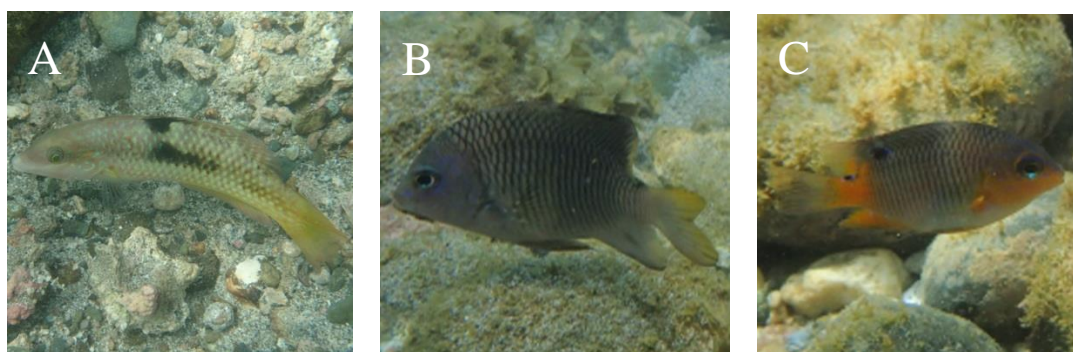


図 3-4 魚類の水中写真の例。(A) ベラ (*Halichoeres nicholsi*)。 (B) スズメダイ (*Stegastes flavilatus*)。 (C) スズメダイの幼魚 (*Stegastes* sp.)。

ボランティアは受け入れ機関の職員と技術的な事を教えたりしながらうまく連携を取りつつ活動をしていく事が理想だ。しかし受け入れ先の SINAC (国家保全地域庁) は調査が仕事ではなく、かつマヌエル・アントニオ国立公園は観光客が多く来るため、パークレンジャーとして働く同僚達は日常の業務で忙しく、基本的に日常の採捕・標本作成等の活動はボランティア単独で行っている。

けれども、私自身国際協力を目的として派遣されているので不本意ながらもこういった単独での活動はあまり良くない。そのため、今年の9月から活動に協力してもらっているコスタリカ大学動物学博物館の授業の一部を受け持って、その中で魚類の標本作成の仕方を教えることになった。日本で魚類標本を作る場合は、ピンを使って鰭を広げてホルマリンで固定する”鰭立て”をするのだが、現地ではしないらしく、博物館で作業していると学生たちに興味深く見られる (図 3-5)。



図 3-5 ハタ (*Epinephelus labriformis*) の標本. (A) 鰭立て中の標本. (B) 鰭立てをした標本. (C) 鰭立てをしなかった標本.

3-4 Isla del Caño

先日、ダイビングライセンスを取りにカーニョ島に行ってきた。コスタリカの海はあまり透明度が高くない所が多いのだが、カーニョ島付近は透明度が高くシュノーケリングやダイビングをしに多くの人に来ていた。養分が多い海流が流れているらしく、そのため島周辺は魚群がすごくかなり感動した (図 3-6)。またウミガメも海底にいて、警戒心が薄くダイバーが近づいても逃げずに大人しくしていた (図 3-7)。

初めてのダイビングでインストラクターの人がかなり適当で戸惑う事もあったが、色々な生き物が観察できて楽しい旅行となった。また後日一緒に行ったダイビングのメンバーでインストラクターの家に行き、バーベキューをした。18時に集合だったが、「18時に行ってもたぶん誰も来ていないな」と思い1時間遅れで家に着いたがそれでも誰もおらず、さらに1~2時間してようやくばらばらと集まり久々に美味しいお肉を頂いた。



図 3-6 フェダイ (*Lutjanus guttatus*) の群れ (撮影 : Fabian Castillo Baldares).



図 3-7 ダイビング中に会ったウミガメ (撮影 : Fabian Castillo Baldares).

3-5 エピローグ

既に派遣されてから、あっという間に 1 年半も経ってしまった。元々受け入れ先の SINAC からボランティアの要請があり、派遣された。けれども調査の許可を得るのに半年もかかり、さらに調査を始めて最初のころ採集して標本を作るという調査に対し、同僚の理解がない等の空回りばかりであった。時間だけは経ってしまったが、今自分ができている事は日本の研究者の方々やボランティア調整員の人達等のたくさんのサポートがありながらも、まだ本当にちょっとした事だけで、言葉も文化も違う外国で一見簡単そうなことでもゼロから何かを始めるとというのが本当に大変な事だと思い知らされた。

人生で初めて外国で生活して今まで見たことない生き物をたくさん見る事ができたり、可愛いラテンの女の子と仲良くなれたり、なぜか男性にモテたり、食事が合わなくて 14 キロも痩せたり、一生懸命仕事を頑張っているでもそれが周りになかなか理解されなかったり、街中で人種差別的な事を言われたりと、良いことも悪いことも他にもあるが、その全てが将来の糧になるようにこれからも続けて頑張っていきたい。